

琢堂さん 照道さん (2)

—樋口琢堂・細井照道小伝のための覚え書—

近 藤 孝 一

(元ひなどり学園長)
(佛教大学講師)

はじめに

京都の社会福祉界と私とのかかわりが出来たのは、昭和二十六年の初夏、養護施設・北山寮（現つばさ園）の児童指導員になったときからである。しかし、樋口琢堂・細井照道の両大先輩には、ついにお目にかかる機会がなかった。

そのことが、かえってお二人の人柄と業績について知りたいという気持ちをも、かきたてたように思う。大照学園（良正院）の応接間で徳富蘇峰の書、吉井勇の歌、福

田平八郎の絵、横山大観からの書簡等々を見るたびに、その交遊の広さに思いを馳せ、和敬学園へ行くたびに、まだ見ぬ『衆善』への期待をふくらませていた。

花田順信先生・乾泰正先生から『佛教福祉』で「京都の仏教者と社会福祉」の特集を組まれることを聞いたとき、私は即座に樋口・細井両氏を担当させて欲しいと願い出た。そしてそのために和敬・大照両学園へしばしば訪れ、秋の彼岸前には四国高松の竜雲学園にも足を運んだ。そして以下のような小項目を掲げて、その中で両先

達のことを書いてみようと思った。その項目を列記してみる。

一、京へ―伊勢と四国から

二、宗派―禅・臨済宗と浄土宗

三、社会福祉―同じ出発（戦前、少年保護）から違っ

た展開（養護施設と精神薄弱児設）

四、交友・人脈―『衆善』をめぐる人々と文人墨客

五、人柄・エピソード他

と、およそこのような組み立てでお二人を対照的に書き綴って行けたらと思った。いわば小説的手法を取り入れてみようかと思ったのである。



晩年の細井照道さん

この気負いがブレーキになり、締切り日がきても文章にならず、編集部にたいへんなご迷惑をかける結果となった。お詫びすると共に、普通どおりお二人別々に小伝を綴り当面の責めを果したい。（「佛教福祉」第14号―昭和63年3月31日発行、再掲）

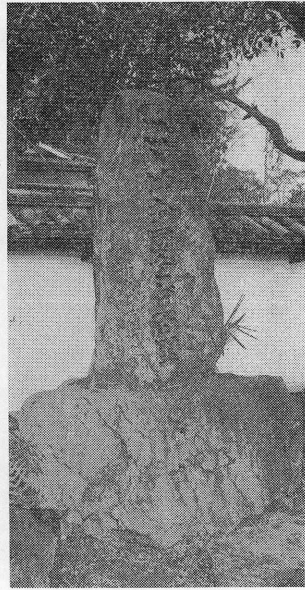
二、細井照道小伝

（一）ここはお国を何百里―忠温と照道

東山三十六峰の一つに標高約二一〇メートルの華頂山があり、そのふもとに、浄土宗総本山知恩院がある。

平安神宮の応天門から南へ、朱の大鳥居をくぐりぬけ疏水にかかる橋を渡る。神宮道と呼ぶ、ほんの少し起伏のあるこの道を真直南へたどって行くと、左手に楠の巨樹が門前に繁っている青蓮院があり、その並びに知恩院の大伽藍がつづき、道は祇園・円山公園へと伸びているのである。

東大路の市バスの停留所・知恩院前から東へ、白川にかかる石橋を渡って進むと知恩院の山内に突き当る。



「ここはお国を何百里」の碑

その二つの道の交わるところ、北側の一角に知恩院塔頭良正院・社会福祉法人大照学園がある。門前右手、楠のもとに石碑があり、その石に刻まれているのは「ここはお国を何百里」の九文字である。

大正15年8月、京都市下京区富小路五条下ル本覚寺境内に開設された大照学園の経営を細井照道さんが引継ぎ再建にあたったのが昭和15年4月であり、これを機に建物を良正院内に移したのである。

「ここはお国を何百里」の桜井忠温さんは軍人である。その忠温さんと、宗教家細井照道さんとは、どのようなことから結びつきが出来たのであろうか……。そのことを教えてくれたのが、現大照学園長・細井弘順さんから

拝借した一冊の本であった。

その本は昭和52年1月15日、有限会社青葉図書より発行された『肉弾將軍・桜井忠温』（永富映次郎著）であり、その第四章「剣をペンに代えて」のところに、照道師と忠温氏の出会いが、次のように綴られている。

昭和二年（一九二七）の秋のある日の午後、飄然とひとりの老僧が桜井新聞班長を訪ねて来た。班長が面会すると、その老僧は、京都・知恩院山内良正院の住職・細井照道老師で、用件というのはこんなことだった。

そのころの騒然たる世相の中に、国民の士気昂揚のためにつくられた、余りにも有名な軍歌「戦友」の歌碑を、作詞者で京都の小学校教師だった、真下飛泉の教え子たちが発起して、良正院の境内へ建設する話がまとまり、桜井班長にその碑面の文字を是非揮毫して欲しいというのだ。

このときから、細井照道と、師に私淑した桜井忠温と

の交遊が始まるのである。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争(第二次世界大戦)勃発後のある日、「戦局いよいよ重大、真に挙国決死のときとなりました。切に御健康御活躍をいのり上げます……。」また同十九年十一月には「帝都もいよいよ戦場となりました。当方被害はございませぬ。空中戦の勇士を思い感無量でございます。……」などの便りを、桜井は老師宛に送っている。

そして昭和二十年八月十五日敗戦。同九月二十五日付で、軍人桜井忠温はそのころの心境を細井照道老師に、次の如く書き送っているのである。

「拝啓、皆様お変わりございませぬか。御無沙汰いたします。このたびのこと悲痛断腸の極でございます。敗れるには敗れるだけの多くの原因が潜んでいたのをごさいました。……略……。」

米軍は京都にも進駐したことでございましょう。日々のニュースを聞くたびに胸の痛くなる思いでございます。……略……。

「道義すたれて勝利なし」私はこの一、二年真に左様

に感じました。人情は薄くなり義理もなくなつた日本人が、勝てる筈はないのです。

宗教家の大いに活動を要すると思います。日本人は何をたのみ、何を目標と致しましょうか……。ただ宗教によつてのみこの痛手を救う外、道はありませんと思います。

……略……。御上京の節はどうぞお立寄り下さい。

「ここはお国を何百里」の碑も倒さなければならぬかも知れません。感無量でございます。(上掲、『肉弾将軍・桜井忠温』)

「ここはお国を何百里」の碑は、作詩者真下飛泉(ましもひせん)の故郷にも建てられていたが、進駐軍の手によつて破壊されたという情報が、右の桜井忠温からの手紙と相前後して、照道師の耳にも入ってきた。

照道老師は早速、真下飛泉の教え子(真下は京都府師範学校卒、市内小学校長等歴任)代表と共に進駐軍事務所を訪れ、「軍歌・戦友」は決して戦争を謳歌しているものではなく、むしろその歌詩は戦争の悲惨さを訴えた

ものであることを力説、自分の命にかえてもこの碑を守りたいとの決意を、切々と訴えたのである。

照道老師のこの熱意が進駐軍主脳部を動かし、「ここはお国を何百里」の石碑は、そのままの姿で今に残されたのである。

桜井忠温があらわした本はおよそ五十冊、その最後の著書となったのが、文芸春秋新社から出版された『哀しきものの記録』である。昭和三十二年（一九五七）十二月のことである。

彼は、細井照道からの出版を祝う書簡に対し、次のような返事をしたためている。



細井照道師の墨蹟

「平素御無沙汰ばかりいたし申わけございません。益々御健康御喜び申上ます。昨夕御手紙をいただき、私の出版について御祝いまで玉わり、何とも恐入りました。久々ぶりの著作乍らまことにつまらぬものにて、老人のよまよい言みたいなもの相成り、一行一行が私を責めてる思いにてお恥しい次第であります。……略……。

御地では広告でもあったのでございましょうか。私はただ一冊見本ずりをもらっただけに、書店にもまだ出ておりますまいと思ひます。……略……。必ず署名いたしまして御送り申上げます。暫らくお待ち願ひ上げます。何分にも明くれば八十歳、元氣ならいいのですが、眼も悪くジンゾウ病もあり、医者通いが日課のようになり、どうせ長いものではありませぬ。従つて「哀しき——」といった言葉が出るのであります。

……略……。愚作であります、必ず一兩日内に御送り申上ます。御健康に御健康に御越年をいのり申上ます。

十二月十六日

忠温老生

細井照道様



桜井忠温のハガキ

死んでから思い出すように
と墨書している。

それから足かけ八年、昭和四十年（一九六五）一月十五日、桜井忠温翁は松山市一番町の菅井病院に入院している。春暖と共に一時小康を得たが、猛暑に入ると急速に老衰、脳軟化症をも併発、九月十七日、満八十六歳の高齡で大往生をとげた。

桜井はその言葉どおり、十二月二十日に出来上った著書早速細井老師に贈呈している。その表紙裏に「この書に題して」として
それこれも忘れよう
生きていることも忘れよう

その葬儀は、仏生山法然寺・第二十七代住職細井照道老師が導師をつとめ、九月十九日に行なわれた。

(二) 履歴をたどって

肉太の万年筆をつかい、昭和拾五年五月三十日付で書かれた、照道さんの履歴書を初めて拝見したのは、一昨年（昭和六十二）の夏、本稿取材のため、大照学園を訪れたとき、園長室においてであった。冒頭の部分を転記する。

- 一、本籍地 東京市杉並区下高井戸町六拾六
- 一、生 所 香川県香川郡仏生山町大字百相
- 一、住 所 京都市東山区林下町四百四拾貳番地
- 一、住職地 高松市外仏生山町法然寺住職
京都市東山区知恩院地内良正院

一、氏 名 細 井 照 道

一、生年月日 明治貳拾五年貳月拾八日

とあり、もう一通の敗戦の年二月にタイプで打たれた経歴には、「細井照道」と「別所照道」の名が併記されている。

このことは、仏生山町在住の別所家の次男として生まれ、地元の小学校から県立高松中学へ進み、明治四十四年三月同校卒業後、法然寺第二十六世細井明道に就いて出家得度し「細井照道」となったことを示している。

仏生山小学校時代にも、数多くの話題があったことと想像されるが、今の私にそれを詳らかにする手だては残念ながらない。そこで高松中学時代の逸話の二、三を、これまた大照学園・細井弘順園長から借覧した『讃岐にこの人あり』（山田竹系著・四国毎日出版社・昭和五十二年六月二十日発行）より、表現を若干かえて援用させていただきます。

話はずんと昔にさかのぼるが、老師は旧制高松中学卒業である。長尾町の庵原氏やもと高松市長故鈴木氏らは、二年ほど老師の後輩であるが、両氏は共に往時の高松中学の野球の名選手であった。そして、この二人に野球の手ほどきをしたのが、なんと旧高中で名セッターといわれた細井照道さんであった。

老師が五年生の時、当時の香川県知事小野田氏の長

男と二人がリーダーとなって、学校創立以来はじめてのストライキをやった。「大体、角帽にするから思いつてストライキをやるんだ」と、そのことが原因で、以来制帽は丸帽子になった。

寺から学校までは、往復一六キロもあるが、ただの一日も学校を休んだことはないとのこと。ある年の紀元節（二月十一日）に珍しく大雪が降った。きょうだけは休もうと思っていると、お母さんが先に立ってほうきで雪をかきのけてくれたので、休むわけにはいかない。そうこうするうちに火の車（まっ赤な郵便車）がやって来たのでそれに乗り登校したことがあった。と。

中学卒業後、本当は医者になりたかったようであったが、何か故あって出家得度、その道の専門教育を受けるため京都へ、仏教専門学校（現仏教大学）に入学。大正四年三月同校卒業後、さらに東京の宗教大学研究所で研鑽を積み重ねて帰洛、大正十一年知恩院に入山するのである。

前掲、昭和十五年五月付「履歴書」経歴欄から再び転

記する。

大正拾壹年九月六日浄土宗総本山知恩院ニ出仕、爾
来、文書課長、社会課長、庶務部長、支那事变部長等
ヲ経テ現ニ主事ノ職ニ在リ

〔社会事業方面〕

華頂会館評議員、東山日曜教園長、華頂少年健児園
長、財団法人平安養育院、財団法人本末共済会常務
理事

〔司法保護方面〕

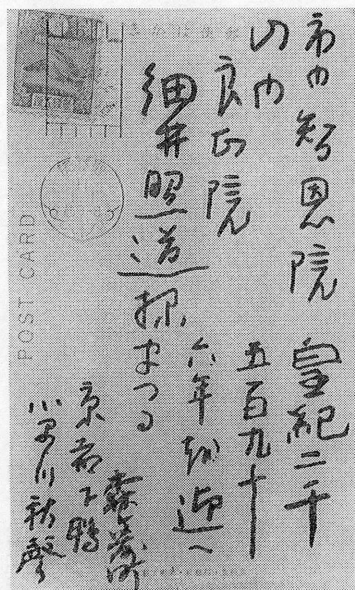
昭和拾貳年九月八日 京都保護観察所囑託保護司
同年拾叁月拾五日 大阪少年審判所囑託保護司
同拾四年九月拾四日 京都司法保護常務委員会参与
同拾四年五月八日 奏任官ヲ以テ待遇セラル
同年五月壹日 大照学園長ニ就任

右之通ニ候也

昭和拾五年五月三十日

右本人 細井照道 ㊟

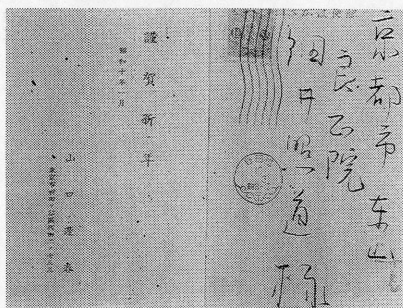
(三) 文人墨客往来



小早川秋声のハガキ

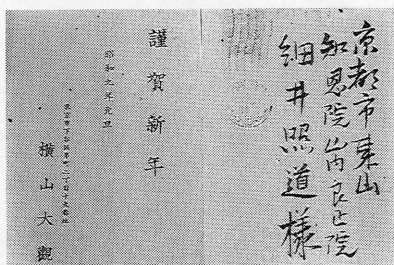
樋口琢堂さんが『衆善』（養護施設・和敬学園機関誌）
を介して、各界の知名人と広くつきあっておられたこと
については前号でふれた。細井照道さんもまた、日本画
家を主にいわゆる文人墨客とも、巾広く交際されていた
ことを見、聞きしていた。それは、いつごろから始まっ
たのであるか……。それが推測できるきっかけが得られ
たのは、一昨年の夏であった。細井弘順さんから「こん
なものが見つかりました」と十枚ほどの年賀状を見せて
もらったことであつた。

その年代は昭和九年、十年、十一年。小早川秋声・山
口蓬春・堂本印象・窠本一洋・山元春拳・横山大観・川

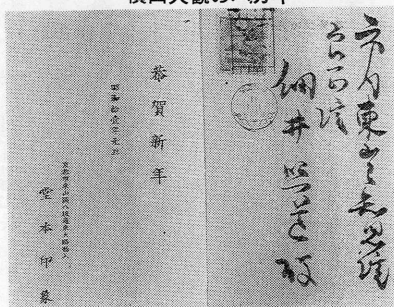


山口蓬春のハガキ

村曼舟・桜井忠温らの名が見られた。昭和四十八年、京都名誉市民に推され、翌四十九年他界した福田平八郎は、良正院の檀家でもあったので、より親交があったことと想像される。そして、これらの人



横山大観のハガキ



堂本印象のハガキ

々の中でも特に交遊の深かったのは、吉井勇であったと思う。勇には、細井照道を詠んだ次のような歌が残されている。

法然の御忌法要の僧の中

照道法師ありやあらずや

知恩院の夜はいや寒き月明り

照道法師すでに寝るらむ

世はきびし照道法師の瘦せ肩も

この頃とみに上りけるかも

東京の生まれながらも、こよなく京都を愛し、また南国の薩摩・高知の風物をも好んだ吉井勇は、法然寺や良正院にも何回か足を運んだことであろう。細井弘順大照学園長の結婚式には、

人はみなうれしとおもひ聴きぬべし

華頂の山の朝鳥のこえ

たのしげに比翼の鳥もあそぶらし

御法かしこき華頂の山に

の祝いの歌を贈っている。

つい先日、その二つの額の飾られた、大照学園園長室で細井弘順さんから、色々とお話を伺っているとき、吉井さんを偲ぶ共通の話題が出た。不思議なことであった。

それは、吉井さんが昭和二十三年から二十四年にかけてのころ、上京区油小路元誓願寺下ルの寓居におられたときのことである。当時、足しげく新村出先生のお宅へ伺っていた私に、ある日先生は「これを吉井君のところへ届けてください」と森鷗外全集の一冊を托された。そのころ、勇ばりの短歌をつくり『洛味』にも投稿していた私は、勇躍、吉井さんの所へ走った。『吉井寓』の表札の文字と、玄関に出られ、「ご苦労さん、ありがとうございます」と、全集を手にした吉井さんの着物が思い出される。同じころ、細井さんも照道老師からの届け物を運んでおられる。その中味はお酒。なんでも少年保護関係の仕事で知り合った方から紹介された、甲州・石和の造り酒屋から入手された「白雀」という銘柄を持って行かれたとのことである。

「吉井勇・細井照道」酒・祇園」

何となく、右のような図式が浮かんでくるのである。

(四) 社会（福祉）事業

社会事業という言葉の中に「福祉」の語が入ってきたのは、戦後、憲法や教育基本法にも、福祉の言葉が使われたことも一つのきっかけになったといわれている。

（より詳しい紹介はここでは省略する）

細井照道が、昭和十四年五月、少年保護施設大照学園の経営を前任者（竹内大観）から引きつぎ同園長に就任、翌年には直ちに建物の改築を成しとげている。

そのころのことを、現大照学園長細井弘順が、若かりし日強く心に刻まれた思い出として、四国高松の姉妹施設竜雲学園の機関紙「うしろ」（再刊第16号昭和六十二年九月）に、次のような回想を寄せている。

……前任者から事業を引き継いだ父は大照学園を建て替えました。「頼まれてあとへ退けん時があるもんや」といいました。

私の目の前に二本の軸がスルスルと揚げられました。一本は横山大観先生の軸、もう一本は私には定かではありませんでしたが、竹内栖鳳先生の軸のような記憶

が残っています。それ等が建築費として消えてゆきました。……略……。

昭和二十三年児童福祉法が施行され、翌二十四年少年法が改正されると共に、大照学園も児童福祉法による、ろうあ児施設に生まれかわることになった。ここまでは、社会事業家細井照道としての時代であった。

社会福祉事業家となつてからの照道は、弘順・俊明、そしてこの二人を内から助^さえてきた育子・宣子の協力を得て、大照学園・竜雲学園の園長・理事長としての施設運営にあたり、機を見てその経営責任を二人の子息に譲って行くのである。

福祉事業になつてからの運営も、初期のころは特に大変であったが、社会事業時代はより大変であった。そのころの施設経営の苦しさの一端を、本誌前号（第14号・一四三〜一四七頁）で乾泰正編集者が報告している。

それを受けながら、大照学園が現在地に移るに当つて、財団法人原田積善会に宛てた細井照道の、助成金交付申請書のことについてふれておきたい。

昭和25年11月20日付、原田積善会に提出された「学園移転増築助成金御交付申請書」は十一項目に分けて書かれている。一〜十項は沿革・施設規模・職員構成・日課等が並び、第十一項が、「助成ヲ要スル理由」である。その内容は次のとおりである。

本園儀去ル昭和十五年二月現在ノ京都市下京区富小路五条下ル地域ニ改築起工同年七月落成同年十二月七日貴会ヨリ金參千五百円次テ戦時中被災ノ場合ヲ考慮シテ分寮設置ニ際シテモ昭和廿年十二月四日金五千円ノ御助成ヲ拝受シ御高庇ニ依リ何等負債ヲ見ルコトナク事業ヲ継続此間宮内省ヨリ毎年御下賜金ヲ拝戴仕候爾来要保護少年ノ收容教化ニ努メ来リ候処昭和廿四年少年法ノ改正ニ依リ三月末日ヲ以テ一応解散同時ニ京都府ノ要請ト本府ニ於テ従来緊要ニシテ然モ実現困難トセラレタル聾啞児收容施設ニ転換現在ニ至リ候

收容児童ハ現在三十名ニシテ殆ト郡部農村ノ貧困ナル家庭ノ児童多ク今日迄放置セラレ居リタル可憐ナル者ナリシモ本園設置ニ依テ安全適切ニ所定ノ教養ヲ享ケ父兄ノ喜ビ識者ノ関心ヲ深メ居候コトハ我々微力ヲ

イタス者ノ感激措ク能ハザルトコロニ御座候

然シ国ノ補給ハ勿論共募ノ受給意ノ如クナラズ臨時施設費ニ於テハ要求額ノ十分ノ一ニモ達シ得ザル現況ニ於テハ到底施設ノ改善充足ハ不可能ニテ不便ヲ忍ビツツ今日ニ至リ候前述ノ如ク現施設ハ旧少年法ニヨル不良化児童ヲ対象トセルモノヲソノ低流用セルタメ環境良好ナラズ且ツ運動場遊戲場トモ狹隘ニシテ不便ナカラズ偶々本年一月参議院厚生委員会委員長一行ノ視察アリタル場合モ此種事業ノ特異性ヲ認メラレ本省ニ勧告ヲ約サレシモ現法令ニ於テハ如何トモナシ難ク共募ニ依存スルヨリ外ニ途無キガ如キ状況ニ有之候

就ハ此俟放置センカ地方ニ残存セル之等可憐ナル児童ノ不幸此上モ無ク又現収容ノ児童ヲモ育成ノ上ニ於テ遺憾ノ点尠ナカラザルニ鑑ミ此施設ヲ改善スルニ要スル費用ヲ宜□知恩院地内良正院地域ノ独立家屋ニ増築改善ヲ施スニ於テハ環境モ良好運動場モ広ク理想的ノ施設ヲ整備シ得ラレカツ園長、主任ノ居住地ニ隣接セルヲ以テ電話モ一個ニテヨロシク経営ノ面ニ於テモ合理化セラルルニ思ヒ及ヒ出願致ス次第ニ御座候

此際良正院ノ維持金ノ支出ヲ諮ル考ナリシモ過日ノジ・台風ノ被災修復ニ金五萬余円ノ支払ヲ為シ寺院自体トシテモ困難ノ状況ニ置カレ居候ニ付移転完了ノ上ハ現下京区富小路ノ建物ヲ売却シ所要経費ノ不足ヲ補願スル意図ニ御座候(ジェーン台風)

尚末尾添付ノプリントハ参議院厚生委員会視察ノ際ニ於ケル資料ニ御座候

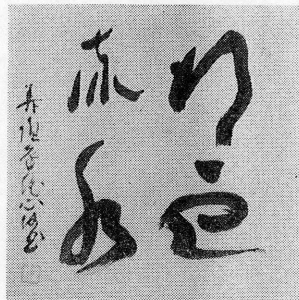
(五) お人柄・エピソード

「ちよつと意外に思ったのは、お書きになったものが少いことでした」と私。

「おやじは、話はうまかったが……、そうですね、書いたものは余りありませんね」と細井弘順大照学園長。

その数少いと思われる文章の数編が『竜雲学園15周年記念誌』(昭和55年4月刊)の巻頭に集められている。

「竜雲学園のこのころ」は、啄木の歌の引用から書き始められている。「旅に思う」では阿波土柱への旅を、記念誌発刊の「挨拶に代えて」の中には、龍三郎・鉦介・寛次郎の名も出てくるし、他の二編の中には、勿論吉



細井照道師の墨蹟「行雲流水」

井勇の名も見られる。

昭和47年11月、機関

紙「うしお」第6号に

掲載された「生命ある

日」を転記紹介しておく。

今年も学園のばら

園に色とりどりの美しい花が咲いた。北原白秋が、ばらの木にはばらの花が咲く、なにごとの不思議なけれど、とうたっておるが、あの花の色を見つめていると、棘をつけて伸びて行く木のどこに、こんな花の色が秘められておるのかと不思議に思えてならない。

ばらを剪定する度毎に、この白秋の詩をうたったり、時には手を合わしたくなるような、優しい思いやりのある心してくれと、この花をいとおしみつつ死んで行った私の友があった。最後の臨終に立会った時の枕元にかって学園から贈ったばらの一株が鉢に植えられてあり、朝夕その花の開くのを、自分の迫りくる生命と対比しておった友の気持を察すると、来年もまた

主なき部屋に咲かせたいものと祈らずにはおられない。

最近の学園の花壇には、赤やピンクや黄色の花に混って一きわ目だつ紫色のグラジオラスに心ひかれる。

眼を本堂の前に移すと、丹精の朝顔が二〇〇〜三〇〇鉢こかしこに円を作って配置され屋根型の細竹に囲われて、やがては真夏の太陽の下で朝の光を一杯に吸い、妍を競うであろうことを楽しみに眺めて「朝な夕な、伸びゆく生命拝みけり」これは私の若い時、とある宴席で朝顔の絵に賛をした句であるが、咲いてはしほみ、摘みとられても伸びて行くあのたくましい成長力に手を合わしたものである。花は愛惜に散り、草は忌嫌に生うるのみという禅語があるが、美しい花は、



細井照道師の墨蹟「春風入寿杯」

人に好かれ散ることを惜しまれる。然し嫌がられる雑草でも、人の努力によって刈りとられて、青もうせんを敷きつめたようにもすることが出来る。要は何

ことも工夫と努力次第である。

「東の里見、西の細井」という言葉をきいた。ある時期、浄土宗内では芝増上寺の里見、京知恩院の細井が、リーダーとして、あるいは論客としてか、その双壁であったのであろう。私はその言葉の中味を知らないし、また私の分野でもないのである。

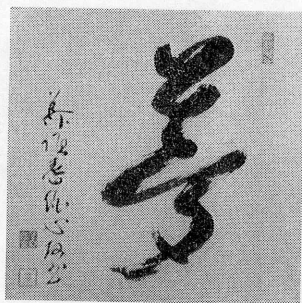
華頂山の麓、知恩院山内良正院で……

——近いこともあり、祇園へはよく行かれたことでし
ようね……。

——父が酔って帰ってきたときは、やはりイヤでした
ね。母も何かと苦勞していたようです。節季、せつきに
はあちこちお使いに行ったこともありましたが。

——私も酔っぱらいの父にはイヤな思い出がいろいろ
あります……。

少時、時間^{とき}が止まった。細井さんは書棚から一冊の本
を抜き出してこられた。『第七回現代名僧墨蹟展』（昭
和48年5月）の図録である。朝比奈宗源・大西良慶・上



細井照道師の墨蹟「夢」

司海雲・今東光・味岡
良戒・大森曹玄・金子
大栄らと並んで細井照
道の名もあり、その墨
蹟は「夢」の一字。

——先年、高松へ行
ったとき聞いたのです

が、野球のテレビ観戦もお好きだったようですね。とき
には娘さん（竜雲学園長細井俊明氏夫人）とカケをなさ
ったこともあったとか……。

——私も小さいとき、よく甲子園へ連れて行ってもら
ったことがあります。春の選抜大会のときに……。

高松・仏生山法然寺内竜雲学園で……

園長夫人・細井宣子さんから主としてお聞きした話を
アレンジしながら……。

——おしやれでした。「父の日」や誕生日のお祝いに
チョコレートなんかと一緒に、香水を贈りましたところ、
たいそう喜ばれました。

——東京から帰ってこられたときのことでした。「向うではないそがしくて、東京のみやげを買う暇もなく新幹線に乗ってしまった。姫路で一分停車したので、あわてて赤穂の塩饅頭買ってきた。さあ、これを……。」

——職員と一緒に研修旅行のときなど、「今日の幹事さん、この財布渡しておくからよろしく。……」と。

——津田先生とと一緒に、最後まで看病させてもらいました。新しい看護婦さんの注射はおいやだったようで、何とか口実をもうけておことわりになり、私の下手な注射を受けてくださったこともありました。そうそう、余りお会いになりたくない方が見えたときなど、よく「寝留守」も使われました。

祇園でも鳴らし、死の数日前までストローでビールを飲んでおられたほどの辛党、その照道さんも晩年はだいぶ甘党化、食後よくケーキを所望されたときく。そんなこともあって、法然寺ではご命日の日に、ビールとケーキがお供えされるとか……。



大照学園の照道窯窯元

昭和五十七年
六月十六日寂、
九十一歳

大照学園授産
部が陶器をつく
り出して昨秋で
十年、そのこと
を記念して「照
道窯」と名づけ
られた。

細井照道略年譜

明治25年 二月十八日、香川県高松市に生まれる。

同 44年 三月、高松中学卒業後、仏生山法然寺第

二十六世細井明道に就き出家得度

大正4年 三月、佛教専門学校（現佛教大学）卒業

同 11年 九月十六日、浄土宗総本山知恩院に出仕。

山内良正院住職

昭和3年	四月、法然寺二十七世住職
同	七月、知恩院文書課長
同 9年	十一月、同庶務課長兼文書課長
同 12年	九月、京都保護観察所嘱託保護司
同	十一月、大阪少年審判所嘱託保護司
同 14年	五月、矯正保護施設大照学園長
同	奏任官待遇
同	九月、京都司法保護常務委員会参与
同 15年	四月、大照学園の経営をひき継ぐ
同 15年	七月、知恩院庶務部長
同 17年	十月、叙従七位
同 21年	四月、知恩院退職
同 24年	四月、生活の大部分を法然寺で過ごす
同	四月、大照学園ろうあ児施設にかわる
同 26年	六月、大照学園良正院境内に移る
同 37年	四月、大照学園精神薄弱児施設となり理事長に就任
同 40年	四月、竜雲学園設立理事長兼園長に就任
同 42年	四月、勲五等双光旭日章受章

同 51年	四月、竜雲少年農場開園
同 52年	四月、竜雲かしのき園開園
同 56年	三月、竜雲学園退職
同 57年	六月十六日九十一歳にて遷化



高松・仏生山法然寺の墓所
(線香を供えるのは次男俊明氏)

※ 京都新聞・凡語（昭和63年10月11日）は真下飛泉生誕百十年を記念して、故郷京都府大江町関に「ここはお国を何百里」の歌碑を建てたことを報じていた。